

私の一冊

一般教育等 鶴橋 俊宏 先生

魯迅著 『呐喊』

小鹿図書館 928 || R 62
「魯迅選集」第一集

魯迅は清朝末から中華民国時代の人で、『呐喊』は初期の代表作を集めた短編小説集である。幼い頃の中国農村の思い出は、当時の中国を知らなくとも郷愁を呼び起こす。子どもたちに未来の希望を託すことばも素直に共感を覚える。しかし、返す刀で中国社会とその民衆とをシニカルに、しかし痛烈に批判する。

例えば、題からして皮肉な『阿Q正伝』では、権力者にへつらい、無知で無自覚な最下層の愚民を描いている。意味も分からず革命を叫び最後には処刑されてしまう。

儒教的道徳のパロディのような「小人」「徳の賊」を登場させるなど、彼の作品は『呐喊』だけでなくこういう救いようのない話が多く、自分を直視せず自他を欺き偷安の夢に沈潜する愚民への憎悪とそれに対する絶望感があふれている。

自序で、漢方医学を否定し西洋医学を学ぶために留学した日本の仙台医学校で、日本軍人に処刑される中国人とそれに喝采する同胞のスライドを見せられ、必要なのは愚劣なる民衆の精神の改革にあると覚る。これが医学から文学へ転向する動機であったと述べる。

「あのことがあってから、医学は決して重要なものでないと悟った。およそ愚劣な国民は体格がいかに健全であっても、いかに屈強であっても、全く無意義の見世物の材料になるか、あるいはその観客になるだけのことである。」(自序)

処刑される阿Qを見世物として見る民衆。『孔乙己』で落ちぶれた文人をあざ笑う民衆を通して、同じ立場にありながら、抗うことのできない権力に蹂躪される人を嘲弄する民衆。なぐさめにもならないことばを吐く知識人。何れも自己と社会の変革に向かおうとしないばかりか、他者を冷笑するだけの悪意ある「傍観者」である。ところが、読み進めると実は魯迅自身も「傍観者」ではないかと思えてくる。

だから、魯迅が大衆の中に入り精神の改革に尽力したとする評価には与する気にならない。それは皮相的な理解か、文学を何か他の目的に利用する人の見方である。

ことばによる表現が我々に何かをもたらすのはどういう時か。例えば尾崎豊は、自己欺瞞とそれに気づかない俗物への怒りを、過激で反社会的ともとれることばで歌っている。彼のことばに共感するのは、攻撃的なことばによって抑圧者の偽善と自己の無力感とを象徴的にえぐ

り出しているからである。「夢」だの「星」だの「花」などを陳列すれば何か新しい表現がうみだされるわけではない。

魯迅はもちろん尾崎とは方法も手段も異なる。皮肉屋で、嫌味で、「傍観者」を高い所から見ている、自分自身「傍観者」である。しかし、そのパラドックスが我々に自分や今の社会を映す「鏡」を与えてくれるのである。ことばが力を発するのはそういう時なのである。

昔の中国の話ではない。ルサンチマンのはけ口を探してばかりいる人、プライドに見合うだけの知性がないことを自覚せず手前勝手な正義をふりまわす人。これらは現代の阿Qである。さらにその独善・愚行・横暴に目をつむる「傍観者」。いずれもそこかしこにいる。

インターネットを使った数の操作や、偶像崇拜の代わりに得体の知れないアルファベットの「神」を崇めているのが現代の姿であるなら、魯迅の批判した因習的な世界と対して変わらない。

魯迅が旧弊を批判したように、まやかしのヒューマニズムに背を向け真理や理想を求め自己変革に向かおうとする時、覚醒を促す魯迅のことばは厳しくも温かく響くことだろう。

(引用は、岩波文庫、竹内好訳『阿Q正伝・狂人日記』による)